

2013年度 事業報告書

特定非営利活動法人ケアリングフォーザフューチャー
ファンデーションジャパン

2013年度の事業計画に基づき、下記の通り事業を実施しましたので、ご報告いたします。

① 各事業の実施に関する事項 (2013年1月1日～12月31日)

事業名	事業内容	実施回・時期	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲および人数	支出額 単位：千円
①海外での開発教育等を活用した青年育成事業	フィリピンワークキャンプ	年6回	フィリピン	3名	日本人98名+現地人	20,376
	フィリピンハッピーキャンプ	年1回	フィリピン	2名	日本人19名+現地人	
	フィリピンスタディツアー	年2回	フィリピン	2名	日本人38名	
	マレーシアワークキャンプ	年6回	マレーシア	4名	日本人111名+現地人	
	マレーシアファミリーワークキャンプ	年1回	マレーシア	2名	日本人14名+現地人	
	マレーシアスタディツアー	年2回	マレーシア	3名	日本人38名	
	キャンプ/ツアー事前研修・事後研修	各キャンプ・ツアー前後(45回程度)	都内周辺および関西・北海道等	のべ100名以上	キャンプ・スタディツアー参加者	
②「子どもの家」支援等を通じた国際協力事業	フィリピン「子どもの家」支援	通年	フィリピン	5名	入所児童+周辺地域	8,607
	マレーシア「子どもの家」支援	通年	マレーシア	5名	入所児童+周辺地域	
③国内での国際協力・青年育成等の啓発・推進事業	イベントへの出展・活動紹介 フェアトレード商品等の販売	年10回	都内周辺および関西	のべ約80名	不特定多数一般	1,061
	よりみち大学	年14回	都内周辺	10名程度	会員および一般	
④災害等の救援・復興に関する事業	東松島市復興支援	1月～4月	東松島市内	3名	東松島市内の被災者	1,113

② 各事業に関する詳細・特記事項

① 海外での開発教育等を活用した青年育成事業

- (1) CFF フィリピン・ワークキャンプ：全6回/第82回～87回（前年度と同回数）
 - (2) CFF フィリピン・ハッピーキャンプ：1回/第10回（前年度と同回数）
 - (3) CFF フィリピン・スタディツアー：全2回/第25回～26回（前年度と同回数）
 - (4) CFF マレーシア・ワークキャンプ：全6回/第23回～28回（前年度比1回増）
 - (6) CFF マレーシア・年越しワークキャンプ：1回（社会人ワークキャンプの代替）
 - (7) CFF マレーシア・スタディツアー：全2回/第10回～11回（前年度と同回数）
- ※総参加者数 318 名（前年比 16 名減）

2013 年度も従来と同様、フィリピン・マレーシアの両国において、ワークキャンプ、スタディツアー、およびハッピーキャンプを実施しました。また、従来の「社会人ワークキャンプ」に代わり、初の試みとして年越しワークキャンプ（ファミリーワークキャンプ）を実施し、好評を得ました。年間ではこれまでで過去最高の総計 18 プログラムを実施することができました。

本事業の実施にあたっては、本年度より旅行会社（株式会社マイチケット）と提携した新しい体制を構築し、当初さまざまな調整が必要でしたが、軌道に乗せることができました。先方が当団体を最大限理解・尊重してくれたこともあり、当団体の持つミッション、プログラム力、フィールドと、旅行会社の持つ旅行実施基盤（旅行業者としての登録、手配力、危機管理能力等）とを掛け合わせ、より間口が広い、社会的価値の高いプログラムが実施可能になったと評価できます。

本年度も、病気・怪我・トラブル・現地情勢の緊迫化等への危機管理対応が求められましたが、この体制のもと、乗り切ることができました。

事業の広報に関しては、従来から引き続き、ボランティアの青年リーダー・過去プログラム参加者等（日本各地）が自ら広報の担い手となり、当事者目線で熱意を持って、現地の子どもや青年たち自身のために当団体のプログラムをアピールしました。

ですが本年度については、とくに春シーズンにおいて、例年と比べて参加者集めに苦戦したことも事実です。これは競合団体の増加という外的要因に加えて、当団体側の事務局体制の変化、旅行会社との提携に伴う旅行代金値上げなどの内的要因が作用したと考えられます。この事態に対して、プログラム日程設定の工夫、日数・価格の変更、広報ツールや印刷方法の改善（カラー化、外注化）、web ページの改修・増強などの取り組みを行いました。結果として、夏シーズンにおいては、定員充足率に若干改善が見られています。

	総参加者数	定員	定員充足率
2012 夏（参考）	164 名	155 名	106%
2013 春	142 名	173 名	82%
2013 夏	139 名	153 名	92%

ワークキャンプ/スタディツアーの事前/事後研修も、従来通りプログラムリーダー（学生）が、準備・プログラム立案・当日の運営を担いました。参加型の手法を駆使した事前研修によって、現地での参加者主体による“気づき”を促し、また、帰国後もただの経験で終わるのではなく、事後研修によって、次の“築き”（＝何らかの社会的行動）につなげることをねらいとしました。

また、主にプログラムリーダーを対象とした「リーダーシップトレーニング」も例年通りに実施しました。新しい取り組みとしては、1回は新潟というフィールドにおいて合宿形式で実施したほか、事後研修前のタイミングで、当団体や自分自身のミッションを考えるプログラムを実施しました。過去のプログラムリーダー経験者（過去リーダー）が主体となって企画する姿も見られました。

過去リーダーの存在は、当団体にとって財産であり、これまでも個々にさまざまな面で、プログラムリ

ーダーに挑んでいる青年（現リーダー）の活動を支えてきました。本年度はより集団として、現リーダーへのサポートができる体制を試みました。

最後に特記すべきこととしては、2014年度に向けた新たな展開として、ミャンマーの視察を実施したことがあげられます。

②「子どもの家」支援等を通じた国際協力事業

CFFフィリピンへの支援としては、前年度から取り組んでいた「子どもの家」第四棟建設事業が完了しました（埼玉国際交流協会「彩の国さいたま国際協力基金」助成事業）。これにより、年齢が大きな入所児童が増えてきた中でも、プライベートな空間や集中できる空間を確保し、それぞれの子どもの成長段階に合わせた支援が可能となりました。

この第四棟建設事業も含めて、事業の主体性を現地フィリピンが本当に発揮できるように支援してきたのか、課題があります。「子どもの家」で暮らす子どもたちの自立も課題ですが、「子どもの家」自体の自立は果たしてどのようにできるのか、問い直し続けた1年でもありました。また、子どもの最善の利益のために、フィリピン側の施設内での調査・見直しに協力し、日本からの訪問自粛を呼びかけた期間もありました。

今後に向けては、新たにフィリピンの障がい児・者（およびその親の会）の支援に日本が協力することについて、話し合いが持たれました。

一方、CFFマレーシアですが、引き続き日本国際協力財団の支援を受け、「経済」「環境」「福祉」の3側面から持続可能な運営を目指して“サステイナブル・デザイン”を推進しました。現地ではさまざま課題が発生している現状もありますが、少しずつ成果が上がってきています。

また、「子どもの家」メインハウスの建設に向けて、6月にはチャリティコンサートが開催され、日本からも支援者が参加しました。

11月にはフィリピンにおいて、2年ぶり2回目のCFF国際コンベンションが開催され、フィリピン・マレーシア・日本3ヶ国のCFFが再び一同に会しました。3ヶ国それぞれからのプレゼンテーションと課題の共有、そしてCFF共通の基本原則（Declaration of Alliance Principle）について議論が交わされました。

寄付については、本年度は特別なキャンペーンは設定せず、継続的な支援（チャイルドケアサポーター）を集めることに青年活動チームとともに力を注ぎました。チャイルドケアサポーターは、年度当初比で10人（16口）増加となっています。

③国内での国際協力・青年育成等の啓発・推進事業

- | |
|--|
| <p>(1) 国際協力イベント・地域イベントへの参加（展示広報・食品販売・物品販売等）
（パンガラニティ奨学金チーム、フェアトレードチーム、東松島市復興支援チーム、マレーチルドレンプロジェクト、アエタプロジェクト、CFF関西チーム、大学チーム、などによる）</p> <p>(2) フェアトレード商品の仕入れ・販売</p> |
|--|

前年度までと同様、青年たちによる国内活動チームの主導によって、国際協力イベントや地域イベントへの出展を行いました。

出展ブースでは、活動の広報や現地状況や問題を知らせる展示を行いました。また、フィリピンやマレーシアのおやつ（食販）や、フェアトレード商品・チャリティ・グッズの販売（物販）を行いました。さ

らに東日本大震災で被災した東松島市の復興支援の一環として、地元の業者より商品を購入し、販売を行いました。これらの販売活動は、販売時に商品の背景（社会状況など）を知らせることができるだけでなく、現地の生産者に資金が渡ること、さらに、多少の寄付を含めた価格で販売することにより運営資金や子どもたちのための資金を捻出できること、と複数の利点があります。

前年度同様、首都圏だけでなく関西などでも CFF の活動チームによってイベントへの出展や参加が行われました。

■ 12 年度に出展した主なイベント

- ・ワンワールドフェスティバル（大阪） ・ハッピーアースデイ大阪 ・アースデイ東京
- ・「let's ちょっとチャット！」（静岡） ・グローバルフェスタ（東京） ・よこはま国際フェスタ
- ・子ども祭り（東松島） ・その他大学学園祭、フリーマーケット出店も多数。

■ その他青年主催活動について

2013 年度は、下記のような青年活動チーム（国内活動チーム）が活動を展開しました。

- ◎CFF 運営委員会・ひなまつり ◎キャンプ・スタディツアー実行委員会（春・夏期）
- ◎パンガラニティ奨学金チーム ◎フェアトレードチーム ◎アエタ・プロジェクト
- ◎チャイルドケアサポーター増やし隊 ◎マレーチルドレンプロジェクト
- ◎マンゴー'S（野球チーム）◎スポーツ支援チーム“ひまわり” ◎CFF FC(フットサルチーム)
- ◎東松島市復興支援活動チーム
- ◎地方チーム（関西、北海道等） ◎大学チーム（東洋、明学等）

ワークキャンプやスタディツアーの中での「気づき」から、青年自らが立ち上げた活動の中には、意欲的に現地（フィリピン等）での直接支援を目指す活動もあります。しかしながら、現地の実際の状況の把握、地元の主体性を阻害しないこと、継続的に責任を持って支援を続けること等、活動チームの枠内では困難な事例も発生し、今後への反省事項としてあげられます。

④災害等の救援・復興に関する事業

当団体では、2011 年 4 月より、宮城県東松島市に職員を駐在させ、被災地復興支援活動を展開してきました。東松島市社会福祉協議会との協働のもと、主には赤い羽根「災害ボランティア・NPO 活動サポート募金」を活用して、みなし仮設住宅等の支援を行ってきたわけですが、震災後 2 年が経つにあたって、いかに活動を地元で定着化させるか、とくに地元の青年層の活動をエンパワメントできるか、検討を重ねました。

最終的には 3 月を持って駐在職員を置いての事業は一区切りとし、職員は引き続き東松島市社会福祉協議会で雇用され、支援活動に従事することとなりました。当団体としては、引き続き青年主体チーム活動として、「CFF らしさ」を生かした活動を続けています。

③ 組織運営について（理事会・事務局）

【理事会】

- ◎ 理事会：計6回
 - 第1回理事会 1月27日（CFF事務局）
 - 第2回理事会 5月17日（CFF事務局）
 - 第3回理事会 7月15日（南大塚地域文化創造館）
 - 第4回理事会 10月12日（豊島区区民活動センター）
 - 第5回理事会 11月7日（CFF事務局）
 - 第6回理事会 12月7日・8日（旅館「太栄館」）※合宿
- ※第1回理事会と同日に総会を開催

◎2013年度理事：

安部 光彦（代表理事）、青木 哲生、荒木 智哉、大矢 裕子、川崎 修、木村 真紀子、二子石 章、双木 小百合（～3/31）、森野 美聡、吉野 輝雄、和田 さより（～3/31）

◎2013年度監事：北川 祐介

本年度の理事会は、とくに新任理事は迎えませんでした。その分人数を絞って、密度が濃い議論を展開することができました。

最重要テーマとして、「ミッション・ステートメントの作成」を掲げ、各理事の想いや考えを共有しつつ、1年間かけて議論し、12月の合宿において明文化することができました。今後、これを団体内外に対してどのように周知していくか、理解・浸透を図るかが課題となります。

【CFF ジャパンのミッション・ステートメント】

私たちは、未来の基盤である子どもと青少年と、共に育ち合いながら、その誰もが未来に希望を持てる社会を築きます。

また、当団体も少しずつ事業体としての色を強め、スタッフの数を増えてくる中で、理事会として求められる役割も変化してきています。次年度は新任理事を迎え、体制も若干あらためた上で、ミッションの実現に向けた経営にあたりたいと考えています。

【スタッフやインターン】

- ディレクター担当 : 安部 光彦、石井 丈士、高梨 恵子
- 日本事務局スタッフ : 川崎 修（非専従/事務局長）、石井 丈士（専従）、高梨 恵子（専従）、鈴木 沙彩（非専従）
- 東松島市駐在スタッフ : 金須 健（専従 ～3/31）
- マレーシア駐在スタッフ : 安部 光彦（専従）、木村 実咲（嘱託 7/1～）
- 海外事業地インターン :
 - 木村 実咲（フィリピン ～3月）、内海 研治（マレーシア 1月～3月）、
 - 宍倉 みのり（マレーシア、7月～9月）、太田 浩司（マレーシア、11月～）
- 事務局インターン : 内山 香里（12月～）

本年度の事務局体制は、現地駐在職員を除いては、前年度と同様の人員で臨みました。個々のスタッフの成長ももちろんですが、全員で力を合わせて支え合い、高め合い、モチベーションを高く業務を遂行す

ることができました。

次年度に向けては、さらなる職場環境の整備とともに、若干の体制変更およびスタッフの増員を予定しています。スタッフの増員は、海外での青年育成プログラムにより力を入れていくにあたって、将来的なディレクター養成を見据えたものです。これに伴い、当団体自身も未来に希望を持ち続けられるように、中期的視野に立った収益基盤の抜本的強化を図っていきます。

④ 2013 年度重点取り組み項目の振り返り

A) CFF ミッション・ステートメントの明文化および浸透	
成果	ミッション・ステートメント本文は明文化 ミッションに関する LST（リーダーシップトレーニング）の実施
課題	ステートメント全体の明文化と周知・浸透の工夫
B) 継続的で対等な海外自立支援へ	
<ul style="list-style-type: none"> ・CFF フィリピンとの連携強化 ・CFF マレーシアへの引き続きの支援 ・CFF インターナショナルの確立 	
成果	CFF フィリピンとの粘り強い対話 CFF マレーシアへの引き続きの支援 CFF インターナショナルコンベンションへの参画
課題	引き続き CFF フィリピンへの自立支援・モニタリング CFF ジャパン自体の持続可能性を確保した上でのマレーシア等への支援 次回インターナショナルコンベンション（2015）開催への取り組み
C) 事業広報の質的強化	
成果	広報ツール等の改善、プログラムスケジュール・価格等の工夫 →定員充足率は改善の傾向へ
課題	組織的なマーケティングの実施 青年向けに特化しつつ大学等と提携しての多様なプログラム展開の必要性
D) 国内事業の基盤整備	
<ul style="list-style-type: none"> ・「よりみち大学」の深化 ・国内事業（仮称：子どもキャンプ）のトライアル実施 	
成果	「ひなまつり」や子どもキャンプ等のトライアル実施 “きっかけづくり”に焦点をあてた運営委員会のリスタート
課題	子どもに関する活動は、ニーズを地道に探らないと事業化は難しい 地域でのネットワーク構築、現場とのつながりづくり
E) 持続可能で着実な組織体制	
<ul style="list-style-type: none"> ・会員およびサポーター制度の一体的運用とコミュニケーション改善 ・支援者データベースの整理・運用 ・新しい会計の仕組み整備 	
成果	新しい会計基準の本格導入と管理会計の仕組み整備
課題	会員・サポーターとのつながり強化のための抜本的取り組みは持ち越し （新しいデータベースシステムの導入は検討した結果見送り） 就業環境の整備も気運は高まったが、具体策は持ち越し